

★ ポーランド出身、大注目の女性ジャズ・ドラマー！ ★ ドロタ・ピオトロフスカ [Dorota Piotrowska]



ドロタ・ピオトロフスカは、ポーランド・ルビン出身。スウィング感と伝統的なリズムを大切にしながら、現代的なテーマを融合させる作曲のセンスにも優れた女性ジャズ・ドラマー。

自身のバンド＝サウンド・サークルは、多彩なミュージシャンで構成され、ネオ・バップとラテンの要素を絶妙にブレンドしたプログレッシブで折衷的なサウンドを生み出している。

この4月に最新アルバム『ヴォイシズ・オブ・ヒューマン・コンシャスネス (Voices of Human Consciousness)』をリリースしたばかりの大注目の女性ジャズ・ドラマーに、最新アルバムのことからジャズとドラムとの出会いなど、ざっくばらんに様々な語ってもらった。

※巻頭特集にドロタの「3つの願い」も掲載！

【2026年5月取材・文：鯉登正之】

♪ 4月25日にリリースされたあなたのニュー・リーダー・アルバム『ヴォイシズ・オブ・ヒューマン・コンシャスネス』について聞かせて下さい

このアルバムは、多くの意味で、この20年間一つまり、よりプロフェッショナルな環境でドラムを演奏し始めて以来の私の音楽的・人生的経験を総括した作品です。私は、音楽は物語を語るべきだと考えています。

そして、自分自身の物語が完全な形で現れるまでには時間が必要でした。このアルバムのアイデアが最初に生まれたのは数年前、2018年頃のことでした。ニューヨークでグレッグ・オズビーと、彼がインディペンデントなミュージシャンのために立ち上げたレーベル「インナー・サークル・ミュージック」から私のデビュー・アルバムをリリースすることについて、初めて話合ったのです。彼はそれに賛同してくれ、そこからこの旅が始まりました。

その後、パンデミックが訪れ、私はポーランドへ戻りました。そこで家庭を築き、2人の子どもの母親になりました。そして2025年、ようやく今こそこの物語を語り、オランダでの学び、8年間過ごしたアメリカ、そして、ポーランドでの経験をひとつにつなげるべき時だと感じたのです。私は頭の中で、調和し、美しく共鳴し合えると思った“声”を集めました。それが、今このアルバムを聴いた時に感じられる音楽となっています。参加しているミュージシャンたちは皆、私の歩みの中でインスピレーションを与えてくれた存在です。友人だった人もいれば、師のような存在だった人もいます。いわば“音のサークル”のようなものです。

私はまた、国際関係学の修士号も取得しています。この分野

にずっと魅了されてきたのは、異なる文化的背景を持つ人々が集まり、創造し、議論し、重要な問題について理解を深めていく姿に敬意を抱いているからです。私は、音楽、とりわけジャズは、そのような対話が共有言語として行われる美しい場だと思っています。そして、今、世界で様々なことが起きている中で、このアルバムには重要なメッセージがあると感じています。この作品では、世界の美しさを称え、異なる文化を持つ人々がそれぞれの伝統を持ち寄り、ひとつの集合的な声として意味あるものを創り上げられることを示したかったのです。

コンセプトが明確になった後、私はスタジオを押さえ、ポーランドとルーマニアでのツアーを企画しました。レコーディング前には3回のコンサートを行いました。楽曲に十分慣れることはできるけれど、新鮮さを失わない、その絶妙な回数でした。そのおかげで、スタジオでは自然発生的で、生き生きとしたエネルギーを捉えることができたのです。

♪ 唇の中の目はこちらを見ているとてもインパクトのあるジャケットのデザインはあなたのアイデアですか？

アルバム・ジャケットには、どうしてもヴォイチェフ・シウドマク作品を使いたいと思っていました。彼は世界的に著名な画家で、私は以前からその作品を深く敬愛していたのです。連絡を取ったところ、とても寛大にも「好きな作品を選んでいい」と言ってくださいました。そして、唇が描かれたあの絵に、私はすぐ惹きつけられました。

特に魅了されたのは、その絵の中に「目」が描かれていたことです。私はそれを“意識”の象徴として捉えています。そして、その目が“声”を象徴する唇を通してこちらを見ている。その発想が信じられないほど力強く、意味深いものに感じられたのです。



特に今の時代、私たちは耳にする音楽が、人間によって作られたものなのか、それとも人工知能によるものなのか、わからなくなることがあります。私は、芸術というものとは、人間の魂や感情、そして、意識が創造の中心にあり続けるべき、最後の場所のひとつだと思っています。『ヴォイシズ・オブ・ヒューマン・コンシャスネス』というタイトルを選んだ理由のひとつも、まさにそこにあります。このタイトルは、私たちが生きている時代そのものを映し出しているのです。

さらに別の側面として、この絵は女性的なエネルギーも表現しており、ある意味では、ポーランド人、そして、ヨーロッパのアーティストとしての私自身のルーツを、ジャケットを通して視覚的に表現したのもでもあります。国際的に活躍しているヨーロッパ出身の女性ドラマーは、まだ比較的小さいので、その点も私にとって大切な意味を持っていました。

♪ アルバムに収録されている「Saba H2O」はお気に入りの曲のひとつです。「Saba」は日本語でサバ（魚の一種）を意味しますが、この楽曲はどのようなイメージやコンセプトからインスピレーションを得て作られたのですか？

あなたの質問に答えるため、この曲を作曲したタレク・ヤマニ本人に尋ねてみました。以下は、彼自身が語ってくれた完全なストーリーです。

「この曲を書いたのは2008年頃、フローニンゲンで活動していた自分のセクステットのためでした。もともとは、有名なムワッシャハの『ランマー・バーダー・ヤタサンナ』へのインロダクションとして作ったもので、特にタイトルは付けていませんでした。おそらく一度だけ、気軽なレコーディングのために演奏されたと思います。ですが、サウンド・サークルがためらうことなくこの曲を再び蘇らせてくれました。この作品は、ダブケのリズムと、マカーム・サバ・ザムザムつまり四分音を含まないサバ旋法一を基にしています。サバは悲しみや哀悼と結びつけられることが多いのですが、私はそこからもっと喜びに満ちた性格を引き出す形で使うのが好きなのです。

タイトルについてですが、「ザムザム」とは、メッカ巡礼（ハッジ）の際に巡礼者たちが飲む聖なる井戸の名前です。このマカーム名がその聖水に由来するのか、それとも別の意味があるのかは分かりません。でも私は、その両方を直接的になりすぎず結びつける方法として『Saba H2O』というタイトルを思いつきました。私は偶然の一致のようなものが大好きなんですが、このタイトルが日本語だと「サバ（魚の一種）」のように聞こえるというのも、最高に面白いですね。」

♪ サウンド・サークルのメンバーについて聞かせて下さい。

サウンド・サークルは、ヨーロッパ、ニューヨーク、そして、さらに広い世界のジャズ・シーンをつなぐ国際的なアンサンブルです。その中心にいるのが、革新的な即興アプローチで知られる現代ジャズの重要人物、グレッグ・オズビーです。私はニューヨークで初めて彼と出会い、その後長年にわたって交流を続けてきました。後に彼は、私がディレクターを務める「ニューヨーク・ジャズ・マスターズ・ワークショップ」の教授としてポーランドにも来てくれました。彼は常に私にとって師のような存在であり、しかも私が最も敬愛するサクソ奏者でもあるので、このプロジェクトに参加してもらえたことは本当に光栄でした。

グループのサウンドを大きく形作っているもう一人が、ノルウェー出身のトランベッター、ヒルデグン・オイセトです。彼女の演奏は、コンテンポラリー・ジャズに北欧的な感性や伝統的なホーンの響きを融合させた独自のものです。私はコペンハーゲンでのレコーディング・セッションで彼女と出会い、その唯一無二のサウンドにすぐ惹かれました。ペースを担当するのはアミン・サリーム。ロイ・ハーグローヴ周辺のシーンと深い関わりを持ち、モダンなストレートアヘッド・ジャズとグループの伝統に根ざしたミュージシャンです。彼ともニューヨークのシーンを通じて知り合いました。

そして、このプロジェクトにおいて非常に重要な音楽的声となっているのが、レバノン・ペイルート出身のピアニスト、タレク・ヤマニです。彼は親しい友人であり共同制作者でもあり、私たちはオランダで共に学びました。彼の音楽は、アラブ音楽のリズム言語とジャズを独自に融合させており、とても個人的に際立ったサウンド世界を作り上げています。キューバ出身のパーカッションニスト、バルバロ・クレスポ（通称マチート）は、キューバの豊かな打楽器文化に深く根差した、強烈なアフロ・キューバンのリズム・エネルギーをもたらしてくれました。

さらにこのアルバムには、ゲスト・アーティストとして、非常に個性的で多彩な表現力を持つポーランドのピアニスト、レシエク・モジジェル。そして、ジャズ、即興、フォークの影響を取り入れた表現豊かなスタイルを持つヴォーカリスト兼チェリスト、サネム・カルファも参加しています。こうした様々な「声」が集まることで、それぞれ異なる伝統に根ざしながらも、共通の音楽言語によって結びついた、とてもパーソナルで国際色豊かなサウンドが生まれました。また、チェリストのヤクブ・ムィシュラクとヴィオラ奏者のマルレナ・グロジツカ＝ムィシュラクも加わり、プロジェクトにさらなる弦楽のテクスチャーを与



えてくれました。

♪ ジャズとドラムとの出会いについて聞かせて下さい。

私が最初にジャズにのめり込んだきっかけは、ポーランドでの師であるズビグニェフ・レヴァンドフスキでした。彼はフュージョンの大ファンで、その影響で私はピーター・アースキンやジョン・ライリーのコンセプトに触れることになり、それが自分にとって重要な土台となりました。

大きな転機となったのは、ポーランドのサクソ奏者ビョートル・パロンのコンサートを観た時です。彼のバンドにはビリー・ハートが参加していました。あの演奏は本当に衝撃的で、それまで小さな湖しか知らなかった自分に、突然“海”を見せられたような感覚でした。その瞬間、自分にはまだ学ぶべきこと、発見すべきことが無限にあるのだと気づき、「自分が追い求めたいサウンドはこれだ」と確信したのです。

それ以来、私はジャズを徹底的に掘り下げ始めました。『マナー・ジャングル』のようなアルバムは、自分の音楽理解を形作る上で大きな節目となりました。デューク・エリントンやカウント・ベイシーの作品群を探索し、ビッグバンド時代からビバップ、その先まで、とにかく手に入るものは何でも聴きました。そうするうちに、自分の心に最も響くサウンドやレコードに出会い、それらを模倣しようと努めるようになりました。

また、私は本当に幸運なことに、成長を導いてくれた素晴らしい師たちに学ぶ機会にも恵まれました。オランダではラルフ・ピーターソンに、そして、ニューヨークではナシート・ウェイツ、グレゴリー・ハッチンソン、ケニー・ワシントンに師事しました。

♪ 最も影響を受けたドラマーを3人挙げて下さい。

トニー・ウィリアムス
ジャック・ディジョネット
エルヴィン・ジョーンズ

♪ あなたのメインドラムのメーカーやセットについて聞かせて下さい。

私は日本のドラムブランド、サカエ・オオサカ・ヘリテージのドラムを使っています。2012年からずっとお気に入りのブランドです。現在使用しているのは、サカエ・トリロジー・シリーズ・ブラック・オイスター・パールです。

18×14 パスドラム
12×8 タム
14×14 フロアタム
16×16 フロアタム
14×5.5 Trilogy スネア

♪ ポーランドのジャズシーンについて聞かせて下さい。

ポーランドのジャズ・シーンは非常に多様で、長く深く根付いた伝統を持っています。共産主義時代には、ジャズは社会の中で特別な存在でした。なぜなら、それは「自由」や「外の世界とのつながり」を象徴する音楽だったからです。多くの人々は、当局からは好ましく思われていなかったにもかかわらず、広く聴かれていた「ラジオ・フリー・ヨーロッパ」の放送を通じてジャズに触れていました。ミュージシャンたちは録音を耳で聴き取り、ときには秘密裏に、一音一音を必死に採譜していたのです。

現在のポーランドでは、ジャズ教育が非常に発展しています。主要都市の多くに大学レベルのジャズ課程があり、優れた創造性を持つミュージシャンのコミュニティも強固です。海外へ行くたびに、私はポーランドのジャズ・シーンの質の高さについて称賛されることが多く、その評判には確かな根拠があるのだと感じています。

私にとって特に印象的なのは、その多様性です。アメリカのスウィングの伝統に深く根差したバンドもあれば、ECM レコードや ACT のようなレーベルに象徴される、より空間的でヨーロッパ的な美学を探索するアーティストもいます。そうした幅広い影響が、このシーンをダイナミックで独自性のあるものになっているのです。

♪ 日本にも訪れたことがありますか？ また、日本に対する印象について教えてください。

私はまだ日本を訪れたことがありませんが、人生の中でぜひ訪れてみたい国のひとつとして、間違いなく最上位にあります。私の友人の多くが日本へ行ったことがありますが、皆まるで言葉では表現しきれないほど特別な何かに出会ったかのような感動を抱いて帰ってきます。そして、決まって「とにかく自分の目で見て行くしかない」と言うのです。

私にとって日本は、価値観や伝統、そして、現代的な暮らしが見事に共存している国という印象があります。穏やかな自然風景から活気ある都市まで、驚くほど美しい場所が広がり、尊

敬、規律、思いやりといったものが、今も日常生活の中に深く根付いている国なのだろうと想像しています。

また、日本には優れた芸術性と繊細な感性があるというイメージも持っています。それは、これまで出会ってきた素晴らしい日本人ミュージシャンたちを通して強く感じてきました。その一人が、私が ザ・ニュー・スクールで共に学んだピアニストの加藤真亜沙です。また、現在とても有名になっている素晴らしいピアニスト、山中みきとも演奏しました。そうした出会いによって、日本への好奇心と敬意はさらに深まっていったのです。

♪ ジャンルを問わず、これまであなたに大きな影響を与えたアルバムを 3 枚挙げて頂けますか？

1. 『マナー・ジャングル』(デューク・エリントン、チャールズ・ミンガス、マックス・ローチ)
2. 『E.S.P.』(マイルス・デイヴィス)
3. 『ウボイエニユ』(パット・メセニー&アナ・マリヤ・ヨベック)

♪ ドラマーとして、一番大切にしていることは何ですか？ また、即興で一番大事にしていることは何ですか？

ドラマーとして私が最も大切にしているのは、表現の自由です。それは、ジャズが非常に力強い芸術である理由のひとつでもあります。ドラムセットを通して、非常に個人的で意味のある形で物語を語ることができるからです。また、他のミュージシャンが何を演奏しているかに対して、その場で自由に反応することも重要だと感じています。そのような対話性、アクティブに聴くこと、そして、その瞬間に完全に存在する感覚は、私にとってドラムを演奏する上で最も美しい側面のひとつです。それは言葉を使わない会話のようなものになります。

即興演奏をする際、私は制限や慣習という枠組みで考えようとはしません。むしろ、もっと深いところへ向かいたいと考えています。それは本能的でプリミティブな領域であり、私たちが共有する“部族的な本質”のようなものです。その意味で、ドラムは非常に古代的で、ほとんどシャーマニックな楽器だと思っています。もともとドラムは儀式やセレモニーのために使われていましたし、現代のコンサートにもそのエネルギーの一部は今なお宿り得ると感じています。現代的な形で、それは人々がリズムや感情、音を通してつながる、一種の集会的なセレモニーのようなものになり得るのです。

♪ 音楽以外で、何か特別な趣味はありますか？

はい、音楽以外にも、私にはいくつか情熱を注いでいるものがあり、それらがインスピレーションや心のバランスを保つ助けになっています。私は昔から文学が好きで、とりわけフランス文学に強い関心を持っています。以前に学んだこともあり、時間があるときにはフランス語の本、特に古典作品を読むことを楽しんでいます。それによって、言語とのつながりを保ち続けることができ、また私が長く魅了されてきた豊かな文化的伝統にも触れ続けることができます。

また、自然の中で過ごすことも大好きです。山でのハイキングやスキーは本当に楽しんでいる活動で、それらは私に自由や視野の広がり、そして、心身のリフレッシュを与えてくれます。料理も好きで、時間があるときにはキッチンで創造的に何かを作ることを楽しんでいます。



もうひとつ深く関心を持っている分野は国際関係です。その分野の本をよく読みますが、文化や社会、国家がどのように相互作用しているのかという点に強く惹かれています。多くの意味で、それは音楽とも非常に近いものがあります。どちらもコミュニケーションであり、相互理解であり、人と人との間に橋を架ける営みだからです。

♪ 将来の夢や目標があれば教えてください。

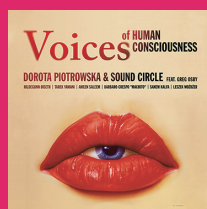
私の最初の夢は、サウンド・サークルで私たちが築いてきた音楽とそのアイデアを、世界のオーディエンスに届けることです。この国際的な対話は非常に重要だと思っていますし、私たちが発信しているメッセージにも大きな意味があると考えています。もうひとつの夢は、2016年に私が立ち上げたワークショップ「ニューヨーク・ジャズ・マスターズ」を復活させることです。これまでに3回開催しましたが、資金面の問題で継続することができませんでした。そして、もうひとつ、いつか音楽と国際関係という私の2つの情熱を統合し、文化を通じて人々をつなぐ意味のある道を築ければと願っています。

♪ 最後に、「The Walker's」の読者、そして、日本のファンの皆さんへメッセージをお願いします。

私の音楽を聴いてくださり、そして、支えてくださっていることに心から感謝を伝えたいです。世界中の人々と私の音楽を共有できることは、とても大きな意味を持っています。私の音楽が、あなたにインスピレーションや好奇心、そして、ほんの少しでも思索の時間をもたらすことができれば嬉しく思います。

【ドロタ・ピオトロフスカ official website】

<https://www.dorotapiotrowska.com/>



『ヴォイシズ・オブ・
ヒューマン・コンシャスネス』
ドロタ・ピオトロフスカ
& サウンド・サークル

Inner Circle Music & Teraz Teraz
2026年4月25日発売

ドロタ・ピオトロフスカ&サウンド・サークル
の最新アルバム！【※P11でアルバムを紹介！】